

沖縄に生まれた共通語（文法編）

著者	永田 高志
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	15
ページ	138-173
発行年	1991-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/11965

沖縄に生まれた共通語（文法編）

永田高志

1. はじめに

現代日本社会は国内においては中央集権化、均一化しつつあり、地域の独立、特異性が失われつつある。国際的には日本経済が世界で力を持ちつつあるのにつれ、帰国子女、在留外国人の増大が顕著である。日本社会の変化が当然言語の面においても影響を与え、方言の消滅、マスコミュニケーションによる流行語の全国的な拡散、共通語の加速的一般化、外来語の氾濫、日本語の国際化等が現代日本語に押し寄せている問題と見てよい。このように考えると、日本語はかつてないほどの歴史的な変化を被りつつあるのではなからうか。

この論文では、沖縄の共通語化に焦点を当ててみた。日本における共通語化を考えるに当たって、大きく三つに分けることができると思う。一つは、本土における共通語化⁽¹⁾である。本土方言は、それぞれの独自性を長く保ってきたというものの、全国共通語と異なるところが少なく共通語との相互理解が可能で、共通語と方言の二言語併用が容易であり、共通語化は徐々に進んできた。共通語を蒸留水、各地の方言を溶解性のある硫酸、塩酸、アンモニアに例えると、本土各地の共通語化は、方言という硫酸、塩酸等の物質に共通語という蒸留水が加えられ、蒸留水の割合が年々高くなり、溶解が時代と共に蒸留水となりつつある。二つには、北海道の共通語化⁽²⁾である。北海道は移民の土地であり、各地の方言が移入され、相互理解のために共通語を基盤に北海道共通語というもの確立された。それぞれ、硫酸、塩酸、アンモニアを各地の人々が持ち寄り蒸留水を混ぜ合わせ独特の溶液を作り出した。最後に、沖縄の共通語化である。沖縄方言は、かつては日本語と異なった言語であると考えられてきた歴史が示すごとく、相互理解が不可能で、まず、共通語を外国語のように学習する必要があった。そして、沖縄方言の影響を受けた共通語を急速に確立していった。沖縄方言は、油という溶解性のない物質で、言語生活においては、油は油、水は水というように用途に応じて使い分けてきた。このように、日本語の共通語化は三つに分けることができる。それでは、必要に応じてつくられた、沖縄の蒸留水はどのような特性を持っているのであろうか。それに対する疑問を解決していこうというのがこの論文の目的である。

まず、日本語は沖縄方言と本土方言に二大区分されるということに関して学界の意見は一致している。そして、沖縄方言と本土方言とは、服部四郎氏の言語年代学的測定⁽³⁾によれば「今から約1450年前ないし1700余年前」に分岐したと考えられ、現在では本土方言話者には沖縄方言は理解不可能になっているといっても過言ではない。しかし、沖縄においても、

廃藩置県以降、共通語教育⁽⁴⁾が普及し、現在では方言は消滅の危機に面し、沖縄方言学者の間では、方言資料採集の急務が叫ばれているのが現状である。しかし、共通語化が盛んであるといっても、沖縄において使われている共通語は、全国共通語とは少々異なり、沖縄ではウチナーヤマトグチ（沖縄大和口）と言われ、奄美ではトン普通語と呼ばれる地域共通語的性格を有する言語となっている。また、沖縄内でも、各地で使われる地域共通語が異なり話者の出身地が推察できるほど、それぞれの特異性を有している。共通語が移入され約100年になり、最初、この地域共通語は、あくまで外部者に対してや、公式場面でのみ使われる公式言語であったが、現在では、老・中年層では沖縄方言とこの地域共通語を場面、聞き手等によって使い分けており、若年層は沖縄方言を理解せずこの地域共通語を母語として話しており、沖縄方言が消滅しつつある現状では、この地域共通語が将来唯一の沖縄の方言となることが予測され、筆者は在来の方言を旧方言、新しい方言を新方言と名付けたい。

それでは、はたして沖縄新方言とはどのような言語的特徴を有する言語であろうか。沖縄旧方言を基層にして、その上に全国共通語が移入されて二言語併用⁽⁵⁾からつくられた接触言語⁽⁶⁾であることに関しては問題点はない。沖縄新方言を二言語併用上の対照言語学的な面からみていくことにする。この論文では、文法的な側面に焦点を当てていくことにする。

かつて、筆者は与那国において、共通語化の過程を音韻、文法、語彙の総合的な面から調査し修士論文⁽⁷⁾にした。含むべき問題点が余りに大きくなりすぎ、全体像はつかめたが、詳しい点については分からないという不満が残っていた。今回は、文法に焦点を絞り考察することにした。しかし、沖縄方言は、各島において大きく異なり一つの島を調査したといっても、沖縄の共通語化の文法的側面はこのようであるとは即断できない。今回は、1987年8月、西表島祖納、1988年3月、奄美大島戸口、宮古島平良、石垣島石垣の調査の報告である。なお、沖縄本島那覇市においても同様の調査を計画したが、那覇では、人口の移入、移出が頻繁であり、出身地によって、また、教育程度、職業、階層等の属性によっても使われている新方言にばらつきがあり、誰をもって那覇新方言の話者とすべきかに問題が残り、今回は調査を断念した。那覇においては、本州の大都市、東京、大阪と同様の大量調査の必要が有ろう。調査表としては、国立国語研究所の「方言文法の全国調査のための準備調査表（1977）」「表現法の全国調査のための準備調査表（1977）」を参考にした。

2. 西表島祖納

西表島は、先島の中の八重山群島の中の石垣島の離島であり、本来は星立、祖納、白浜、船浮の村落だけが広い西表島に存在した。祖納はその一つである。祖納旧方言は沖縄語辞典⁽⁸⁾によると、琉球方言の中の、先島方言群の中の八重山群島方言に属する方言である。宮良当壮氏⁽⁹⁾によると、祖納は石垣島石垣から移民によって構成されているとあり、言語的にも石垣方言と近いと思われる。

調査は、1987年8月、那根弘（明治44年生まれ）宮良全作（大正3年生まれ）前大用安（大正13年生まれ）、宮良用範（昭和26年生まれ）の各氏に御協力頂いた。那根弘、宮良全作両氏の新方言を中心に、前大用安、宮良用範両氏の新方言は参考という形で提示したい。

2. A 西表島祖納の言語生活

まず、西表祖納の共通語化に関する言語生活を概観すると、明治23年に西表簡易小学校が設立され、共通語教育が始まったと思われる。また、共通語化に大きな影響を与えたのは炭坑の存在である。明治18年に炭坑採掘事業が始まり、本土からの人々が移入してきて、共通語に接する機会が与えられた。児童達は本土出身の児童と交流し、また、大人達も魚、米の行商を通じて交流を行った。大正12年度の西表全島の戸数人口調査表によると、

部 落 名	戸 数	人 口
西 表	172	817
上 原	20	76
崎 山	31	142
沖 縄 炭 坑	85	434
琉 球 炭 坑	199	966
先 島 炭 坑	12	52
計	519	2487

とあり、炭坑の人の全てが本土出身とはいえないが、島内住民の半数以上が外部移入者であった。いま、西表島は、沖縄の中で最も共通語化の進んだ土地といわれている一つの原因はここにある。現在では、進学、就職のため本土との行き来を行い、また、観光事業のため本土の観光客が来島し、また、テレビの普及により益々共通語化が進んでいる。

2. B 西表祖納新方言の文法

2. B. I 動詞

ア) 活用

全国共通語では、活用が五段、上一段、下一段、カ変、サ変と区別があるが、祖納旧方言では平山輝男氏他⁽¹⁰⁾によると、上一段、下一段動詞が基本語幹ではrを含む語幹のみが存在し、終止語幹と命令語幹に二つの形があり、rを含む語幹が新しく用いられるようになり、ラ行五段化し、五段動詞に統合されつつある。新方言を五段、上一段、下一段、カ変、サ変の以下の五つの活用形に分けて見てみると、以下のようになる。

種類	五段	上一		下一		カ変	サ変
例	書く	起きる	見る	寝る	開ける	来る	する
語幹	か	お	み	ね	あ	(く)	(す)
未然	か	き きら	み みら	ね ねら	け けら	き こ	せ し
連用	き	き	み	ね	け	き	し
終止	く	きる	みる	ねる	ける	くる	する
連体	く	きる	みる	ねる	ける	くる	する
仮定	け	き きれ	み みれ	ね ねれ	け けれ	きく くれ	せす せれ
命令	け	き きれ	み みれ	ね ねれ	け けれ	こ い	せ れ
志向	こ	き ろ	み ろ	ね ろ	け ろ	こ き	せし しろ

従来の学校文法の活用形に志向形を加えた。五段、上一段、下一段の活用形には、ウを接続し、「書こう」、「起きろう」、「寝ろう」のように、カ変、サ変には、ウ、または、ヨウを接続し、「きよう」、「こよう」、「せよう」、「しよう」、「しろう」のように活用する。

カ変、サ変の未然形は、否定のン、ナイが接続し、「きない」「こん」「こない」「しない」「せん」「せない」のように活用する。

上の表を見ると、活用が統合していることが見てとれる。上一段活用と下一段活用がラ行五段化の傾向を示し、五段活用に統合しつつある。上一段活用の「見る」を例にとれば、未然形は否定のンを付けて「見らん」、連用形は「見て」、終止形は「見る」、連体形は「見る時」、仮定形は「見れば」、命令形は「見れ」、志向形は「見ろう」のように、ラ行五段化が進行している。連用形が「見りて」になれば、完全に五段化してしまう。カ変、サ変が一段化の傾向を示す。カ変は、未然形「きない」、仮定形「きれば」、志向形「きよう」、サ変は、未然形「せん」、仮定形「せれば」、命令形「せれ」、志向形「せよう」となる。

イ) 授受動詞

旧方言では、

私が友達に本をやった。 bandu duḡiti ŋumutḡiba ɕida
 友達が私に本をくれた。 duḡidu banti ŋumutḡiba ɕida

(du は係助詞、ti は格助詞ニ、ba は格助詞ヲ)

というように、やり手からもらい手に物を渡す行為は、çiru を用いて表現している。しかし、全国共通語では、話者ともらい手が同一のときは「くれる」、同一でないときは「やる」という語を用いる。新方言では、「やる」「くれる」という関係語の区別は習得している様子である。しかし、「友達が私に本をやった」という使い方を子供のときに使っていた、聞いたことがあると報告されており、かつては区別がなかったようである。

ウ) 移動動詞

旧方言では、聞き手の所へ話者が移動するとき、聞き手を中心に、ku (来る) を使う。全国共通語では、話者を中心に「行く」を使う。新方言では、「行く」と「来る」は併用されている。しかし、ほとんどの人は全国共通語では「行く」を使うと意識している。

2. B. II 形容詞

旧方言では、形容詞は「語幹+さあり」というように形成され、「あり」で活用している。平山輝男氏等⁽¹⁰⁾によると、「高い」は以下のように活用する。

語幹	未然	連用	終止	連体	条件	過去	接続
tahas-	-ara	-a	-ai	-ai	-akka	-akta	-ati
			-an	-aru			

新方言では形容詞は以下のように活用する。

例	高 い	め ず ら し い
語 幹	た か	め ず ら し
未 然	×	×
連 用	く か っ	く か っ
終 止	い	い
連 体	い	い
仮 定	け れ	け れ

全国共通語のように未然形の「高かろう」、「めずらしかろう」が存在せず、新方言では後で述べるように推量は「はず」を付け、「高いはず」、「めずらしいはず」と言い、「かろ」は欠落している。旧方言の影響で「あり」の活用を残し、「めずらしくある」、「めずらしくあるなら」という使い方が残っている。

2. B. III 形容動詞

全国共通語では形容動詞があり、本来、旧方言には形容動詞は存在せず、現在どのような形が用いられているか関心のあるところであるが、日常生活では、形容動詞は一般に用いず、他の語彙で代用している。しいて、「静かだ」と「きれいだ」を聞いたが、「静かだ」は「静かだはず」(静かなはず)「静かって」(静かだって)「静かかった」(静かだった)、「きれいだ」は「きれくある」(きれいである)「きれくあった」(きれいだった)と形容詞と混同し、形容動詞は品詞として充分独立していない。

2. B. IV 助動詞

ア) 可能

旧方言には、能力可能と状況可能の区別が以下のように存在する。

(うちの子供は大きいので、一人で服を) 着ることができる。 kififin

(この服は小さいが、まだ) 着ることができる。 kisarisu

新方言においても、着ることができるは、能力可能は「きりきれる」で、助動詞としてはキレル、状況可能は「きれる」で、レルを使って区別を保っている。キレルという語については、全国共通語の「～し尽くす」(明日までには読みきれる)という意味の「きれる」からの借用か、当時九州からの炭坑移民が多く、九州方言からの借用か二つの可能性が考えられる。しかし、九州方言では、キルで能力可能を表す地域はあるが、キレルはない。また、レルで状況可能を表す地域もない。そうすると、キレルは全国共通語からの借用と考えた方が良さそうである。この様に、共通語、他地方の方言に類似する語を当てはめて能力可能と状況可能を区別しようとしている。共通語化の進行していくなかで、本来の方言での区別は保とうとする姿に、新方言に残る本来の方言の影響の強さを感じさせる。

イ) 否定

旧方言では、

書かない kakan

のようにnを付属させる。新方言では、「書かん」(書かない)、「食べん」「食べらん」(食べない)のようにンを付ける。全国共通語のナイも使うが、親しい場面ではンの方が一般的で、旧方言の影響が残ったものである。

ウ) 推量・伝聞

全国共通語では、同じ推量でも、伝聞、様態、想像のどれによって推量するかによって語を区別している。旧方言では、どれについても

書くだらう kaku hatji

のように hatji を付属させて用いる。新方言では、「行くはず」(行くだらう)、「高いはず」(高いだらう)、「静かだはず」(静かだらう)、「鳥だはず」(鳥だらう)のように、ハズを動詞、形容詞、形容動詞の終止形に、また名詞プラス断定の助動詞「だ」に付属させて用いる。注意すべきは全国共通語の当然、義務、予定の「はず」と異なり、主観的推量を表す。伝聞による推量「～らしい」、「～だそうだ」、様態による推量「～のようだ」、「～そうだ」、想像による推量「～だらう」にでも、ハズを用いる。しかし、中・若年層は、伝聞には、「高いつて」のように形容詞の終止形に、「静かって」のように形容動詞の語幹に、「雨って」のように断定の助動詞「だ」を接続せずに名詞にそれぞれッテを接続して用いる。

エ) 意志・勧誘

全国共通語では、五段活用動詞には「う」、その他には「よう」を付属させるが、旧方言では、

書こう kaka 起きよう ukira しょう sa: 来よう ku:

のように、五段活用、上一段、下一段動詞には a、サ変動詞には a:, カ変動詞には u: を付属させる。新方言でも、五段、上一段、下一段の志向形に u、サ変、カ変には志向形に u、またはヨウを付属させて、「書こう」、「起きろう」、「寝ろう」、「しろう」、「しょう」、「せよう」、「きよう」、「こよう」のように用いる。年長層は親しい間柄では「起きろう」、公式場面では「起きよう」というように場面で使い分けているが、若年層は、自分の意志で独り言を言う時には「起きよう」、他人を促す時には「起きろう」との意味の使い分けに変化している。共通語化の一步進んだ姿であろう。

オ) 義務

「～なければならない」は、旧方言では、

行かななければならない iha nakkaranaran

しななければならない sa: nakkaranaran

というように、nakkaranaran を用いる。新方言では、「行かななければならない」は、「行かんとならん」のように、ントナランと使う。

カ) 願望

全国共通語では、「～たい」と助動詞で形容詞活用を行うが、旧方言では、

書きたい kakissai

と ssai が形容詞活用を行う。新方言では、動詞の連用形にタイを付けて用いる。しかし、タイは形容詞に準じて、「行きたくある」「行きたくあった」「行きたくあれば」のように用

いる。

キ) アスペクト

全国共通語では継続態と結果態の区別がないが、旧方言では以下のように区別がある。

「雨が降っている。」は、 fuibu
 「雨が降っていた。」は、 fuibureru

となる。

結果態は、雨が降って道が濡れているのを見て、雨が降っていた状態が結果として残っている時に用いる。新方言でも、継続態は「降っている」、結果態は「降ってある」のように、テイルとテアルで区別を示す。単に継続動詞だけでなく、「死ぬ」という瞬間動詞でも、死んでいるのを発見した驚きを表し、「死んである」を使っている。本永守靖氏⁽¹¹⁾によると、沖縄本島では過去に第三者の行為を見て、その事実を報告するのに「読みよった」(読んでいた)のようにヨッタと用いるらしいが、祖納新方言ではこの用法もまた「読んであった」とテアルであらわす。全国共通語で、「この茶碗はもう洗ってある」という動作の完了、「看板が出してある」という結果の状態等を表す「てある」を用いていることからの借用であろう。しかし、新方言における結果態の表現する意味分野は全国共通語の意味分野より大きく、語を借用しただけであろう。沖縄でも旧方言の結果態の表す意味分野が各地で異なり⁽¹²⁾、新方言もそれに応じて各地で異なっている。旧方言でのアスペクトの区別を新方言でも残そうとする。

ク) 過去

全国共通語では、動詞の連用形に「た」を付ける。旧方言では、

行った ihjan 起きた ukida

のように、語幹に ita-ida 又は jan を付ける。新方言でも「行った」のようにタを用いる。

ケ) 受身

全国共通語では動詞の未然形に「れる」、「られる」を付けて表現する。旧方言でも rin-rirun-rarin-rarirun を用いるが、他動詞にのみ受身形は用いられ、自動詞の受身、いわゆる迷惑の受身は存在しない。例えば、「孫に先に起きられる」等は、表現上存在せず、

孫が先に起きた ma du fitari ukida

という。新方言でも動詞の未然形にレル、ラレルを付けて表現するが、迷惑の受身は存在しない。単純に「孫が先に起きる」を用いる。しかし、若年層は迷惑の受身も使うようになっている。

コ) 使役

全国共通語では、五段、ナ変動詞の未然形に「せる」を付けて、その他の活用の動詞には「させる」を付けて表現する。旧方言では、

書かせる kakafi miru 起きさせる ukufi miru

のように jin-jimiru-jimirun を付け、五段と上一段、下一段の区別がない。動詞の活用の統合化によって全国共通語と接続が異なる。新方言ではサ変以外は動詞の未然形にスを付けて表現する。「起きる」、「来る」は、サスを併用している。

種類	例	使 役
五段	行く	いかす
	書く	かかす
上一段	起きる	おきらす・おきさす
	見る	みらす
下一段	寝る	ねらす
	開ける	あけらす
サ変	する	させる
カ変	来る	こらす・こさす

ここでも、上一段・下一段活用はラスとなり、ラ行五段化している。

2. B. V 助詞

ア) 格助詞の省略

新方言では、主格を表す「が」(花が咲いた)、到着点を表す「に」(東京に行く)、目的格を表す「を」(酒を飲む)は、省略されることが多い。全国共通語でも、「に」以外は省略されることがあるが、旧方言では省略されるのが普通である。

イ) 係助詞の「が」

注目すべきは、強調のガの使用である。旧方言では、係助詞の du が存在し、

御酒を飲む gu:ji du numi

というように、対比、強調の意味で使われる。しかし、全国共通語では、「ぞ」が存在せず、新方言では、最も対応するガで代用する。例えば、

ビールは飲まないが、酒は飲む。

は、

ビールは飲まないが、酒が飲む。

というように用いる。これは、「酒ぞ飲む」から「酒が飲む」というように用いられたものである。また、「ここにある」というように、「ここに」を強調して用いる。筆者⁽⁷⁾が、かつて与那国で調査した時は、「私かが行く」というように、ガを重複して用いる。

ウ) 移動手段の「から」

全国共通語では、移動手段は「船で来た」というように「で」で表すが、新方言では「船から来た」というようにカラを用いる。旧方言では、

船で来た Φ uni radu kita (radu は kara du)

というように用い、「東京から来た」も to:kjo: radu kita と使う。起点を表す「から」と意味分野が近く、語形が一致するためにこのように用いる。

エ) 仮定条件の接続助詞

「ば」と「なら」と「たら」について、全国共通語では、田中章夫⁽¹³⁾によれば、『たら』の方は、前件が成立するか否かに表現の主眼がある言い方であり、『から』の方は、どちらかという前件が成立した場合の結果に表現の中心がある」のように、「ば」と「なら」と「たら」は置き換え可能な用法もあるが、全ての場合に置き換えられるわけではない。旧方言では、

起きれば ukirja du

と使い、ja のみで、「ば」、「なら」、「たら」の区別がない。新方言では、全部が同じように用いられ、「もっと早く起きるならよかった」というように、タラ、バを用いる時にも、ナラを用いている。

オ) 禁止の終助詞

旧方言においては、

書くな kakina

のように、ina が接続し、終止形に接続していないように見えるが、平山輝男氏他⁽¹⁰⁾によれば、音韻変化を起こしただけで、全国共通語と同じく終止形に接続している。新方言でも、ナを用いる。

カ) 疑問の終助詞

旧方言においても、

誰か takka

と、全国共通語と同様に用言の終止形、体言に接続し、新方言においても、「誰か」のように、カを用いる。

キ) 終助詞の「わけ」

新方言では、「どこに行くわけ」というように終助詞としてワケが使われている。首里方言を記載している沖縄語辞典⁽⁸⁾によると、baa が接尾辞として「わけ。理由。caaru baaga どういうわけか。」という例が載せられている。中本正智氏の御教示によると旧方言では baa が終助詞化しており、新方言においても baa を「わけ」と翻訳し、終助詞として用いたものである。

3. 奄美大島戸口

「沖縄語辞典」⁽⁸⁾による分類によると、琉球方言は、奄美・沖縄方言、先島方言、与那国方言と下位区分され、奄美大島本島は、奄美・沖縄方言に所属する。戸口は本島の北東部の

海岸沿いに位置する村落であり、本島方言の中で北部方言に区分されている。奄美大島においても沖縄と同様、在来方言は本土方言と大きく異なり相互の理解はほとんど不可能である。沖縄と異なるのは、1609年の島津氏の琉球侵攻以降、薩摩藩に直轄され、鹿児島方言の影響を受けたことも予想されるが、それを裏付ける資料がない。

調査は、1988年3月、武義辰氏（昭和2年生まれ）、久保正道氏に御協力頂いた。なお、この記述は武義辰氏の新方言を中心に行う。

3. A 奄美大島戸口の言語生活

奄美においての最初の共通語との接触は学校教育を通じてである。当時は、共通語は教室においてのみ使われ、それ以外の言語生活は方言を通じて行われていた。従って、共通語は、外国語教育のような方法で学習されていた。しかし、第二次世界大戦中、男は兵士として他の本土出身者達と交流を行い、共通語を生活語として学習し、男の方が女より共通語が旨く話せた。共通語と方言は場面によって使い分けられ、彼らの話す共通語はできる限り共通語に近づけようとするが、仕方なしに方言の影響の残る言葉であった。それが、現代、65歳以上の人々の言語生活であった。昭和20年終戦と同時にアメリカ軍の占領下におかれ、共通語化が遅れたことが予想される。しかし、昭和28年の本土復帰以降、共通語化が急速に進んだ。特に、テレビ等のマスコミの影響を通して共通語化が進むと同時に、旧方言を話せない世代が育ち、共通語化した旧方言、ここで言う新方言が第一言語としての力を持ち始めた。倉井則雄氏⁽¹⁴⁾は、戦後、新方言が言語として使われるようになり、新方言に対し「トン普通語」（注1）という名称が一般化し出した事実を述べ、「トン普通語」が使われる理由を、a.共通語を知らない場合、b.共通語を知っていてもうっかり使ってしまう場合、c.共通語を知っていてもわざと使う場合と三種類の分析している。特に、cのわざと使う場合には地域社会の仲間意識を示す生活語としての機能を述べている。有識者からは「トン普通語」と蔑視される新方言が、最近の中・高校生の間では、積極的に方言語彙を取り入れ、より確立した言語となりつつある。復帰を境に、新方言がピジン（pidgin）からクレオール（creole）に成長したと考えられる。そして、教育を受けた若い世代では、新方言と共通語を場面によって使い分けることが可能であるものも数少なくない。

3. B 奄美大島戸口新方言の文法

3. B. I 動詞

ア) 活用

旧方言の動詞は、共通語の四段と上一段、下一段の動詞がほぼ同じ活用をし、活用の統一化が顕著である。寺師忠夫氏⁽¹⁵⁾は、奄美旧方言の動詞変化は、一般的には、

未然	連用	終止	連体	仮定	命令	志向
-an	-i	-jun	-jun	-i	-i	-o

例 読む

juman	jumi	jumjun	jumjun	jumi	jumi	jumo
-------	------	--------	--------	------	------	------

となり、弱変化をするのは、an (有る) ijun (言う) kjun (来る) njun (見る) won (居る) が全てであると述べている。

新方言の動詞の活用は以下の通りである。

種類	五段	上一		下一		カ変	サ変
例	書く	起きる	見る	寝る	開ける	来る	する
語幹	か	お	み	ね	あ	(く)	(す)
未然	か	きら	ら	ら	けら	こ	せせら
連用	き	き	み	ね	け	き	し
終止	く	きる	る	る	ける	くる	する
連体	く	きる	る	る	ける	くる	する
仮定	け	きれ	れ	れ	けれ	くれ	すせれ
命令	け	きれ	れ	れ	けれ	こい	せれ
志向	こ	きろ	ろ	ろ	けろ	こよ	すろ

ここでは、従来の学校文法の活用形に志向形を加えた。五段、上一段、下一段、サ変の活用形には、さらにウを接続し、「書こう」、「起きろう」、「寝ろう」、「すろう」のように、カ変は、「こよう」のようになる。

未然形は、「書かん」、「起きらん」のように、ンを接続させる。語彙により音便形が発達していない。促音便の「散った」「散っている」を「散りた」「散れている」と言う。上一段、下一段動詞が、ラ行五段化しているのを見て取れる。上一段の「起きる」を例にとると、「起きらん」、「起きます」、「起きる」、「起きる時」、「起きれ」（起きろ）、「起きろう」（起きよう）となり、連用形のみが例外であるが、武義辰氏によると、若年層は「起きります」と連用形にまでラ行五段化が進行している。また、倉井則雄氏⁽¹⁴⁾によると、「見ります」、「着りなさい」、「出ります」とラ行五段化が、上一段、下一段動詞の全てに若年層では進行しており、サ変動詞も「せらん」（しない）、「します」、「する」、「する時」、「すれば」、「せれ」（せよ）、「せろう」（しよう）とラ行五段化の道を進んでいる。若年層ではクレオーレ言語の特徴である活用の統一が進み、新方言がピジンからクレオーレ化しているのが分かる。

イ) 授受動詞

全国共通語では、話し手ともらい手が同一のときは「くれる」、同一でないときには「やる」と話し手の立場によって表現が変わるが、旧方言では、「私が友達に本をやった」の「やった」も「友達が私に本をくれた」の「くれた」も、やり手からもらい手に物を渡す行為は、kurjun で表し、新方言でも、「私が友達に本をくれた」と表現し、旧方言の表現法をそのまま継承している。なお、「友達から本をもらった」は、旧方言でも、morajun で、新方言でも全国共通語と同様に「もらう」を使う。

ウ) 移動動詞

旧方言では、聞き手の所へ話し手が移動するときには、聞き手を中心に、kjun をつかい、共通語では話手を中心に「行く」を使う。新方言でも、「私もすぐ来るから」と「来る」を使う。

3. B. II 形容詞

旧方言の形容詞は、寺師忠夫氏⁽¹⁶⁾によると、

未然	連用	終止	連体	仮定
ku	sa	sa	san	sarī

と活用する。

新方言では形容詞は以下のように活用する。

全国共通語のように未然形の「高からう」、「めずらしからう」が存在せず、新方言では、「かる」は欠落している。若年層ではク活用とシク活用の区別がなく、ク活用に統一している。例えば、「珍しい」は「むずらい」と使う。旧方言では、形容詞は、名詞に「ある」を付加し、「暑い」は「暑さがある」と造語する。倉井則雄氏⁽¹⁴⁾によると、新方言の形容詞を造語するには、旧方言の atjisa の「さ」を「い」にかえ「暑い」を生成すると共通語と同じ

になることから、「珍しい」も旧方言で muzirasa というので「むずらい」という形容詞を造語する。この造語法も、若年層にのみ存在し、武義辰氏の世代では、共通語をそのまま受け入れていたが、世代が下がるにつれ、新方言が確立した言語として成長し独自の造語法を持ちだしたものである。

例	高い	めずらしい
語幹	たか	めずらし
未然	×	×
連用	く か っ	く か っ
終止	い	い
連体	い	い
仮定	けれ	けれ

3. B. III 形容動詞

全国共通語では形容動詞が用いられているが、本来、旧方言には形容動詞が存在せず、現在どのような形が用いられているか関心のあるところであるが、形容動詞は形容詞と混同している。方言の類似する形容詞の語彙から活用させ、例えば、「きれいだ」は、旧方言の kjasasa の「さ」を「い」にかえ「きよらい」と用いる。共通語の「きれい」を用いるときにも、「きれくない」（きれいでない）、「きれくなる」（きれいになる）、「きれかった」（きれいだった）、「きれいの本」（きれいな本）というように用いる。

3. B. IV 助動詞

ア) 可能

旧方言には、能力可能と状況可能の区別が以下のように存在する。

(うちの子供は大きいので) 泳ぐことができる ogikirirjun

(この池はきれいなので) 泳ぐことができる ogar'in

新方言においても、泳ぐことができるのは、能力可能は「泳ぎされる」で、助動詞としてはキレル、状況可能は「泳げる」で、エル、レルを使って区別を保っている。キレルという語については、全国共通語の「～し尽くす」（明日までには読みされる）という意味の「される」からの借用か、旧方言では、kirjun（切る）という動詞が助動詞化して可能の意味を表すようになったもので旧方言からの写し替えか、薩摩藩の直轄下に置かれたことから鹿児島方言の影響の三つの可能性が考えられる。寺師忠夫氏⁽¹⁶⁾は、鹿児島方言からの借用であろうと説いているが、能力可能にキレルという用法は、沖縄全島の新方言に使われており、沖縄では旧方言でキレルとは言わないことを考えると、キレルという語が共通語からの借用である可能性が強い。共通語化の進行していくなかで、本来の方言での区別は保とうとする姿に、新方言に残る本来の方言の影響の強さを感じさせる。

イ) 否定)

旧方言では、

書かない kakan

のようにnを付属させる。新方言では、「食べらん」（食べない）のようにンを付ける。全国共通語のナイも使うが、親しい場面ではンの方が一般的で、旧方言の影響が残ったものであろう。

ウ) 推量・伝聞

旧方言では、共通語と同様、同じ推量においても、他人からの伝聞、主観的な想像、様態を見ての予想によって、以下のように区別がある。

伝聞 ta:sa itji（高いそうだ）

想像 ta:sa darun（高いだろう）

様態 ta:sa ge sari（高いそうだ）

新方言でも、伝聞は「高いっち」、想像は「高いだろう」、様態は「高そうだ」と同じ区別を残す。

エ) 意志・勧誘

全国共通語では、五段活用動詞には「う」、その他には「よう」を付属させるが、旧方言では、

書こう kako 起きよう ukiro しよう jiro 来よう kjuro

のように、全ての動詞にoを付属させる。新方言でも、五段、上一段、下一段、サ変には志向形にウを付属させて、「書こう」、「起きろう」、「寝ろう」、「すろう」のように用いる。年長層は、自分の意志で独り言を言う時には、「起きよう」、他人を促す時には「起きろう」と意味の使い分けがある。旧方言からの活用は「おきろう」で、そこに共通語の「おきよう」が導入され、意味の変化に発展したものであろう。しかし、若年層では、共に、「おきろう」に変化している。

オ) 義務・当然

「～なければならない」は、旧方言では、

行かなければならない ikimaje

というように、imaje を用いる。寺師忠夫氏⁽¹⁷⁾によると、義務や論理的必然を表すのに、旧方言では「－イマエ」(動詞連用形+マエ/－imaje/) を用いる。新方言では、「行かなければならない」は、「行きまい」のように、マイと使う。共通語の否定の意志「行くまい」の「まい」には、新方言では「行かんど」と使い、「まい」を使わず混乱はない。

「～はずだ」は、旧方言では

行くはずだ itʃunhazī

というように、hazī を用いる。新方言では、「行くはず」のように、ハズを使う。

カ) 願望

全国共通語では、「～たい」と助動詞で形容詞活用を行うが、旧方言では、

書きたい kakiʔtʃasa

と ʔtʃasa が形容詞活用を行う。新方言では、動詞の連用形にタイを付けて用いる。しかし、タイは形容詞に準じて、「行きたくはある」「行きたくする」(行きたがる)のようによく用いる。

キ) アスペクト

新方言では報告態もしくは回想態とも言うべきアスペクチュアルな区別が残っている。「昔はよくこの辺では雨が降ったなあ」を回想をして「降りよった」、「あの人は上手に字を書いていたよ」を他人に報告するのに「書きよった」とヨッタを用いる。過去の継続的動作の回想、あるいは、報告という意味で使われる。旧方言では、動詞連用形+をり(wün)+過去(ta)と分析されるアスペクトである。

旧方言では寺師忠夫氏⁽¹⁵⁾によると、

継続態 読んでいる judün←judī+wün

結果態 読んである juda:n←judī+an

と、区別が残っていると記述されているが、武義辰氏には、旧方言においてもその区別が明確には残って居らず、新方言でも区別はしていない。生塩睦子氏⁽¹²⁾による伊江島方言、まつもとひろたけ氏⁽¹²⁾による喜界島大朝戸方言の報告にも結果態と継続態の区別がなくなりつつあることが記されており、戸口方言においても武義辰氏の世代では失われたものであろう。継続態は、新方言では「降ってる」(降っている)「散れてる」(散っている)とテルで表す。結果態はテイタと継続態+過去で表す。

ク) 過去

全国共通語では、動詞の連用形に「た」を付ける。旧方言では、寺師忠夫氏⁽¹⁵⁾によると、過去形は語基部の形によって、kasa←kakjun(書く)の様に-sa、tuta←turjun(取る)の様に-ta、kada←kamjun(食べる)の様に-da、kaʔtja←kaʔtjun(勝った)の様に-ʔtjaと変わる。

新方言では「行った」のようにタを用いる。語彙により音便形が発達していない。促音便の「散った」「散っている」を「散りた」「散れている」と言う。

ケ) 受身

全国共通語では動詞の未然形に「れる」、「られる」を付けて表現する。旧方言でも、arinを用いる。他動詞にのみ受身形は用いられ、自動詞の受身、いわゆる迷惑の受身は存在しない。例えば、「孫に先に起きられる」等は、表現上存在せず、「孫が先に起きた」という。新方言でも動詞の未然形にレル、ラレルを付けて表現するが、迷惑の受身は存在しない。単純に「孫が先に起きる」を用いる。

コ) 使役

全国共通語では、五段、ナ変動詞の未然形に「せる」を付けて、その他の活用の動詞には「させる」を付けて表現する。旧方言では、

書かせる kakasjun 着させる kisasjun

のように、sjun を付け、五段と上一段、下一段の区別がない。動詞の活用の統合化によって、全国共通語と接続が異なる。新方言では、五段、サ変は動詞の未然形にスを付けて、上一段、下一、カ変はラスを付けて表現する。これもラ行五段化によって連用形をラまで含めると、全ての動詞の連用形にスを付けると解釈できる。

種類	例	使役
五段	行く	いかす
	書く	かかす
上一段	起きる	おきらす
	見る	みらす
下一段	寝る	ねらす
	開ける	あけらす
サ変	する	さす
カ変	来る	こらす

3. B. V 助詞

ア) 格助詞

「東京に行く」というような方向を示す「に」が、「東京ち行く」とはうように、チになる。

「遊びが行く」「見が行く」というように、全国共通語では、「に」を使うところにガを用いる。寺師忠夫氏⁽¹⁶⁾によると、旧方言では、動詞 ikjun (行く) の目的を表す語が動詞から派生した名詞に限り、afibiga ikjun というように ga を用いる。

イ) 移動手段の「から」

全国共通語では、移動手段は「船で来た」というように「で」で表すが、新方言では「船から来た」というように用いる。旧方言では、

船で来た *huni hara ʔtja*

というように用い、「東京から来た」も *to:kjo: hara ʔtja* と使う。起点を表す「から」と意味分野が近く、語形が一致するためにこのように用いる。

ウ) 係助詞「ば」

新方言では、酒を強調して「酒を飲む」という時に、「酒ば飲む」というように、バとすることがある。旧方言では、目的格の助詞は一般には用いず、*ba* は強調の意味を持ち、係助詞的な役割を持つ。

エ) 接続助詞

新方言では、レバ、ダレバが接続助詞として使われている。順接の確定条件には、動詞にも「するんだれば早くして欲しい」(するなら)、形容詞にも「低いんだれば」(ひくいなら)、名詞にも「鳥だれば」(鳥なら)というように断定の「だ」をつけてダレバを用いる。順接の仮定条件には、「早く起きればよかった」というようにレバを用いる。寺師忠夫氏⁽¹⁵⁾によると、旧方言では、順接の確定条件には、

行けばわかるだろう *ikiba wakarjo*

の様に *ba*、

読めないなら置いていけ *jumarannariba usuki*

の様に *nariba*、順接の仮定条件には

雨が降らなかったら、行くのだった *aminu furantariba ikjutamba* のように、*tariba* で区別している。

オ) 禁止の終助詞

旧方言においては、

書くな *kakuna*

のように、*una* が動詞の終止形に接続する。新方言でも、ナを用いる。

カ) 疑問の終助詞

旧方言においても、

誰か *takka* 飲むか *njumukka*

と、全国共通語と同様に用言の終止形、体言に接続し、新方言においても、「誰か」、「飲むか」のように、カを用いる。

キ) 終助詞の「わけ」

終助詞として、「どこへ行くの」の「の」のような意味で、「どこへ行くわけ」というように使われている。若い世代、特に女性を中心に沖縄全体に使われているようで、那覇からの

流行語として移入されたものであろう。

ク) 強調の終助詞「が」

自分の意向を聞き手に押し付けるような言い方で、「酒飲むが」というようにガが用いられる。共通語では「飲むぞ」の「ぞ」に当てはまる。長田須磨・須山名保子・藤井美佐子諸氏⁽¹⁸⁾には、旧方言でもこの ga が同じように使われると記述がある。

ケ) 終助詞「ば」

旧方言では、長田須磨氏他⁽¹⁸⁾には、旧方言で、a. 「～したらどうか」、b. 「～するったら」という意味で ba が使われるとあり、新方言でも、同様に、a. 「早く起きんば」(さあ早く起きたら)、b. 「酒飲まんば」(酒を飲むぞ) というように用いられている。

4. 宮古島平良

平良は宮古島の中で、空港も先島航路の停泊港をも持ち中心地である。しかし、宮古島は、地理的には沖縄本島と先島観光の中心地石垣島との中間にあり観光の面でも、また、島内に産業が乏しい関係もあり産業の面でも、外来者の移入が少ない。平良方言は、沖縄方言の中の先島方言の宮古方言群に属する方言である。

調査は、1988年3月、下地美恵子(大正14年生まれ)大嶺政明(大正10年生まれ)東風平紀子(昭和16年生まれ)、奥浜幸子(昭和24年生まれ)の各氏に御協力頂いた。ここでは、下地美恵子氏の新方言を中心に記述することにする。

4. A 宮古平良の言語生活

共通語化については、明治15年に平良市の平良小学校において普通教育が始まり、明治20年には宮古島各地に小学校が設立された。明治38年には、皇民化教育の一貫として普通語奨励が実施され、学校内での普通語(共通語)が義務づけられた。それに違反したものは罰として方言札を付けられ、その制度は戦後まで残った。しかし、共通語化は他の地域に比べて遅れており、共通語が盛んに使われるようになったのは戦後であるといわれている。現代では、30才ぐらいまでの若者達では、旧方言は理解は出来るが、使用するのは新方言である。他地域と比べると、旧方言が使われる割合が高いので、新方言が充分に発達していず、沖縄本島、特に那覇の新方言の表現が侵入しようとしている。

4. B 宮古島平良新方言の文法

4. B. I 動詞

ア) 活用

旧方言については、平山輝男氏⁽¹⁹⁾によって詳しい調査がなされており、以下旧方言の記述を氏の調査を基に述べていこう。平良旧方言では、動詞は活用の面で、五段、一段・二段、

変格に分類が出来る。以下の通りである。

	未然	連用 1	接続形	確定	連用 2	連休	命令	終止 2
	志向			条件形		終止		
書く	kaka	kaki	kaki:	kaki	kakī	kakī	kaki	kakīm
見る	mi:	mi:	mi:	mi:ri	mi:	mi:ī	mi:ru	mi:m
する	su:	si	si:	si	'asī	'asī	'assu	'asīm
くる	ku:	kīsi	kīsi:	kīsi	kisī	kīsī	ku:	kīsīm

全国共通語では、活用が五段、上一段、下一段、カ変、サ変と区別があるが、平良旧方言では上一段、下一段動詞が、五段動詞と区別を定ち、ラ行五段化が進行していない。

新方言の活用を五段、上一段、下一段、カ変、サ変の以下の五つの活用形に分けてみると、以下のようになる。

種類	五段	上		下		カ変	サ変
		一		一			
例	書く	起きる	見る	寝る	開ける	来る	する
語幹	か	お	み	ね	あ	(く)	(す)
未然	か	き	み	ね	け	こ	し せ
連用	き	き	み	ね	け	き	し
終止	く	きる	みる	ねる	ける	くる	する
連体	く	きる	みる	ねる	ける	くる	する
仮定	け	きれ	みれ	ねれ	けれ	くれ	すれ
命令	け	きろ	みろ	ねろ	けろ	こい	せし ろ
志向	こ	きよ	みよ	ねよ	けよ	きこ よよ	し よ

従来の学校文法の活用形に志向形を加えた。五段の活用形には、ウを接続し、「書こう」、上一段、下一段の活用形にはヨウを接続し、「起きよう」、「寝よう」のように、カ変、サ変には、ヨウを接続し、「きよう」「こよう」、「せよう」、「しよう」のように活用する。

カ変、サ変の未然形は、否定のン、ナイが接続し、「きない」「こん」「こない」「しない」

「せん」「せない」のように活用する。

上の表を見ると、他の沖縄方言に比べると、活用が統合していないことが見てとれる。上一段活用と下一段活用は、五段活用と確固たる区別を残している。命令形は、「見ろ」のように用い、他の沖縄新方言のように「見れ」にはならないが、若い世代では、「見れ」に転化しつつあり、新方言でも那覇から新語形が侵入しつつあることが被調査者の内省から分かった。

新方言では、「～する」という様に、多くの動詞をサ変動詞を用いて造る。

イ) 授受動詞

旧方言では、やり手からもらい手に物を渡す行為は、fi:ʔi (注3) を用いて表現している。しかし、全国共通語では、話者とももらい手が同一のときは「くれる」、同一でないときは「やる」という語を用いる。新方言では、「やる」「くれる」という関係語の区別はなく、「友達が私に本をやった」という使い方をする。「友達から本をもらった」という、貰い手を中心にする言い方があり、「もらう」と「やる」のみが存在し、「くれる」はない。

ウ) 移動動詞

旧方言では、聞き手の所へ話者が移動するとき、聞き手を中心に、kʰi:ʔi (来る) を使う。全国共通語では、話者を中心に「行く」を使う。新方言では、「行く」と「来る」は併用されている。しかし、ほとんどの人は全国共通語では「行く」を使うと意識している。

4. B. II 形容詞

旧方言では、形容詞は「語幹＋くあり」というように形成され、「あり」で活用している。平山輝男氏等⁽¹⁰⁾によると、「赤い」は以下のように活用する。

赤く (akakari) 赤い (akaka'i) 赤い～
(akaka'i, aka: akann)

赤いので (akakariba, akaka'iba) 赤ければ
(akaka cika: akakaraba)

赤かった (akakata, akaka'ita)

新方言では形容詞は以下のように活用する。

例	高い	めずらしい
語幹	たか	めずらし
未然	かろ	かろ
連用	く かつ	く かつ
終止	い	い
連体	い	い
假定	けれ	けれ

4. B. III 形容動詞

全国共通語では形容動詞があり、本来、旧方言には形容動詞は存在せず、現在どのような形が用いられているか関心のあるところであるが、日常生活では、形容動詞は一般に用いず、他の語彙で代用している。若い世代は、旧方言の形容詞が *asakai* (浅い) のように「くある」から造語されることから、形容動詞を「きれいさい」(きれいだ) のように用いる。

4. B. IV 助動詞

ア) 可能

旧方言には、沖縄の他の地域に存在する能力可能と状況可能の区別が以下のようにない。旧方言では、五段動詞に *i* をつけ、一段動詞、カ変動詞に *rai* を付けて活用させる。

戸がきつくてどうしても開けられない (能力可能)

jadunu sī p^si nikaibadu no: ŋimai akirain

戸が壊れていて開けられない (状況可能)

jadunudu jaburiuibadu akirain

分布からみると、宮古にもかつては区別が存在したことが予想されるが、下地氏はじめ、全てのインフォーマントに区別が残ってはず、「書ける」は *kakai du su* または *kakī du su* で、新方言においても、ともに「書ける」という。しかし、那覇からの影響で若い人々は、能力可能と状況可能のどちらにも「書ききれる」というキレルを使い初めている。

イ) 否定

旧方言では、

書かない *kakan*

のように *n* を付属させる。新方言では、動詞には「書かん」(書かない)、「起きん」(起きない) のように未然形に *n* を付け、形容詞には「高くない」のように *nai* を付ける。動詞には全国共通語の *nai* も使うが、親しい場面では *n* の方が一般的で、旧方言の影響が残ったものであろう。

ウ) 推量・伝聞

全国共通語では、同じ推量でも、伝聞、様態、想像のどれによって推量するかによって語を区別している。旧方言では、どれについても

書くだらう *kak pa^dzī*

のように *pa^dzī* を付属させて用いる。新方言では、「行くはず」(行くだらう)、「高いはず」(高くだらう)、「静かだはず」(静かだらう)、「鳥だはず」(鳥だらう) のように、ハズを動詞、形容詞、形容動詞の終止形に、また名詞プラス断定の助動詞「だ」に付属させて用いる。注意すべきは全国共通語の当然、義務、予定の「はず」と異なり、主観的推量を表す。伝聞による推量「～らしい」、「～だそうだ」、様態による推量「～のようだ」、「～そうだ」、想像

による推量「～だろう」にでも、ハズを用いる。

エ) 意志・勧誘

全国共通語では、五段活用動詞には「う」、その他には「よう」を付属させるが、旧方言では、

書こう kaka 起きよう uki しよう su: 来よう ku:

よのように、五段活用には a、上一段、下一段動詞には i、サ変動詞、カ変動詞には u を付属させる。新方言でも、五段動詞の志向形にウ、その他にはヨウを付属させて、「書こう」、「起きよう」、「寝よう」、「しよう」、「きよう」、「こよう」のように用いる。

オ) 義務・当然

旧方言では、義務を表すのに、

行かなければならない iki kumata

というように kumata または gumata が使われ、新方言では、「行くべき」というようにベキ、もしくは、「行かんとならん」のように、ントナランと使う。

カ) 願望

全国共通語では、「～たい」と助動詞で形容詞活用を行うが、旧方言では、

書きたい kakitasa

と tasa が形容詞活用を行う。新方言でも、「書きたい」とタイを使う。

キ) アスペクト

全国共通語では継続態と結果態の区別がないが、旧方言では以下のように区別がある。

「雨が降っている。」は、 furju:

「雨が降っていた。」は、 fuiria

で、継続態は u をつけ、結果態は a を付けて区別する。

結果態は、雨が降って道が濡れているのを見て、雨が降っていた状態が結果として残っている時に用いる。新方言でも、継続態はフッテイル、結果態はフッテアルのように、孫が先に起きる」を用いる。テイルとテアルで区別を示す。男性語として、テイルはテオルも使われている。単に継続動詞だけでなく、「死ぬ」という瞬間動詞でも、死んでいるのを発見した驚きを表し、「死んである」を使っている

ク) 過去

全国共通語では、動詞の連用形にタを付ける。旧方言では、

行った ik^sitaī うけた ukitaī

のように、語幹に taī 付ける。新方言でも「行った」のようにタを用いる。

ケ) 受身

全国共通語では動詞の未然形に「れる」、「られる」を付けて表現する。旧方言でも可能の助詞と同じで、五段動詞に i をつけ、一段動詞、カ変動詞に rai を付けて活用させる。新方

言でも動詞の未然形にレル、ラレルを付けて表現するが、迷惑の受身は存在しない。「孫に先に起きられる」は単純に「孫が先に起きる」を用いる。

コ) 使役

全国共通語では、五段、ナ変動詞の未然形に「せる」を付けて、その他の活用の動詞には「させる」を付けて表現する。旧方言では、

書かせる kakasi 受けさせる ukisimii

のように、五段動詞には si、一段動詞には simii を付ける。新方言では、四段動詞には動詞の未然形にスを付けて表現する。上一段、下一段、カ変には、サスをつけ、サ変は「さす」を用いる。

種類	例	使役
五段	行く	いかす
	書く	かかす
上一段	起きる	おきさす
	見る	みさす
下一段	寝る	ねさす
	開ける	あけさす
サ変	する	さす
カ変	来る	こさす

また、使役の「す」を用いて、他動詞を造る。本来、他動詞が独立して存在する動詞にも、使役の「す」を用い、「開ける」の代わりに「開かす」と使う。また、旧方言では「教える」という語は、「習わせる」(nara:si) という表現を用い、新方言でも、「習す」と、使役の「す」を用いている。

4. B. V 助詞

ア) 格助詞の省略

新方言では、主格を表す「が」(花が咲いた)、到着点を表す「に」(東京に行く)、目的を表す「を」(酒を飲む)は、省略されることが多い。全国共通語でも、「に」以外は省略されることがあるが、旧方言では省略されるのが普通である。

イ) 係助詞の「が」「は」

注目すべきは、強調のガとハの使用である。旧方言では、係助詞の du が存在し、御酒を飲む sakju: du num

saki (酒) + u (を) + du

というように、対比、強調の意味で使われる。しかし、全国共通語では、ゾが存在せず、新

方言では、最も対応するバまたはガで代用する。例えば、

ビールを飲まずに、酒を飲もう。

は、

ビールを飲まずに、酒をば飲もう。

というように用いる。また、「ここにがある」というように、「ここに」を強調して用いる。

ウ) 移動手段の「から」

全国共通語では、移動手段は「船で行った」というように「で」で表すが、新方言では「船から行った」というように用いる。旧方言では、

船で行った Φ uni karadu ifutai (karadu は kara du)

というように用い、「東京から来た」も to:kjo: karadu kisitai と使う。起点を表す「から」と意味分野が近く、語形が一致するためにこのように用いる。上記の本永守靖氏⁽²⁰⁾の調査によれば、本島においてもよく使われる誤用である。

エ) 仮定条件の接続助詞

「ば」と「なら」と「たら」について、全国共通語では、田中章夫氏⁽¹³⁾によれば、「たら」の方は、前件が成立するか否かに表現の主眼がある言い方であり、からの方は、どちらかという前件が成立した場合の結果に表現の中心がある」のように、「ば」と「なら」と「たら」は置き換え可能な用法もあるが、全ての場合に置き換えられるわけではない。旧方言では、

雨が降ったら aminu fu²itjika:

と使い、tjika:tiga: のみで、バ、ナラ、タラの区別がない。新方言では、全部が同じ様に用いられ、「もっと早く起きるならよかった」というように、タラ、バを用いる時にも、ナラを用いている。

オ) 禁止の助動詞

旧方言においては、

書くな kakina

のように、終止形に na が、全国共通語と同じく終止形に接続している。新方言でも、ナを用いる。

カ) 疑問の終助詞

旧方言においても、

誰か takka

と、全国共通語と同言の終止形、体言に接続し、新方言においても、「誰か」のように、カを用いる。

キ) 終助詞の「わけ」

全国共通語の「どこへ行くの」の終助詞の「の」のように、「どこへ行くわけ」とワケが

若い世代で、特に女性に使われている。被験者の内省によると最近になって広がりだした言い方で、那覇からの流行語としての移入と思われる。

ク) 終助詞の「べき」

旧方言では、義務を表すのに、

行かなければならない iki kumata

というように kumata または gumata が使われ、これらは、意義が広く、「どこへ行くの」というと「の」にも使われており、新方言でも、kumata または gumata の直訳の「べき」を当てはめ、「どこへ行くべき」と使われている。この用法は、上のワケが若い世代に使われているのに対し、主に、老年層に使われている。

ケ) 付加疑問の格助詞「さいが」

旧方言では、「～じゃないか」というときに、saiga が使われ、新方言でも、「きれいさいが」(きれいじゃないか) というように、サイガが使われる。

コ) 終助詞

他の終助詞に、強調をして「僕行くさ」のようにサ、聞き手に同意を求めて「僕行くよ」のようにヨ、聞き手に質問して「あんた行くね」というようにネがある。

5. 石垣島石垣

石垣島石垣は先島の中の八重山群の中心地で、市役所、税関等があり政治の中心であるだけでなく、漁業協同組合、農業協同組合等もあり商業の中心地でもあり、八重山で唯一高等学校のある都市で教育の中心地でもある。交通の面でも、空の便では空港、海の便では先島航路の寄港が有り、八重山諸島の中心地となっている。石垣旧方言は、先島方言の中の八重山方言の一分派であると考えられている。

調査は、1988年3月、比屋根勇（明治44年生まれ）本名光（明治44年生まれ）宮良永壮（大正13年生まれ）の各氏に御協力頂いた。比屋根勇、本名光両氏の新方言を中心に記述する。

5. A 石垣島石垣市の言語生活

まず、石垣島石垣の共通語化に関する言語生活を概観すると、共通語教育は、明治14年、石垣最初の小学校、石垣南小学校の開設によって始まったと思われる。現在では、八重山群の離島で過疎化が起り、まず身近の中心地石垣市に人口が集中しつつある。つまり、離島には義務教育以上の教育施設がなく、学童は高等教育を受けるために石垣市に来る。また、親たちも、子供達に教育を与えるには現金収入が必要で、離島には生活に必要な食料は自足できるが現金収入の道がなく、親も一緒に石垣市に来るという生活形態が一般化している。このため、離島の旧方言同士では、意志疎通に問題が生じるため、共通語化が進んでい

る。しかし、石垣市においても、使われる共通語は、全国共通語とは異なり、石垣新方言が使われている。

5. B 石垣新方言の文法

5. B. I 動詞

ア) 活用

石垣旧方言の動詞の活用は、平山輝男氏⁽¹⁰⁾によると、以下のようになる。以下、旧方言の記述には平山輝男氏⁽¹⁰⁾と宮良当壮氏⁽⁹⁾を参考にする。

	未然	連用	終止	連体	仮定	命令	志向
五段 書く	kaka	kakī	kaku	kaku	kakukka:	kaki	kaka
			kakun				
一段 起きる	uku	uki	ukin	uki	ukikka:	ukiri	uku
	ukira		ukirun				ukira
見る	mju:	mi:	mi:n	mi:	mi:irikka:		mju:
サ変 する	sa	sī	sī:n	sī	sī:kka:	si:	sa:
カ変 来る	ku:	kī:	kī:n	kī:n	kī:kka:	ku:	ku:

一段活用の「起きる」が、ukin と ukirun の二つの活用形が現れ、ラ行五段化の道を進んでいるのが分かる。

新方言では、五段、上一段、下一段、カ変、サ変の以下の五つの活用形に分けてみると、以下のようになる。

従来の学校文法の活用形に志向形を加えた。五段、上一段、下一段の活用形には、ウを接続し、「書こう」、「起きろう」、「寝ろう」のように、カ変、サ変には、ヨウを接続し、「きよう」、「こよう」、「せよう」、「しよう」のように活用する。

カ変、サ変の未然形は、否定のン、ナイが接続し、「こん」「こない」「しない」「せん」のように活用する。

この表を見ると、活用が統合していることが見てとれる。上一段活用と下一段活用がラ行五段化の傾向を示し、五段活用に統合しつつある。上一段活用の「見る」を例にとれば、未然形は否定のンを付けて「見らん」、連用形は「見て」、終止形は「見る」、連体形は「見る時」、仮定形は「見れば」、命令形は「見れ」、志向形は「見ろう」のように、ラ行五段化が進行している。連用形が「見りて」になれば、完全に五段化してしまう。しかし、旧方言においても mi: でラ行化していない。カ変、サ変が一段化の傾向を示す。カ変は、未然形「こん」、仮定形「くれば」、志向形「きよう」、サ変は、未然形「せん」、仮定形「せば」、命令形「せ」、志向形「せよう」となる。

種類	五段	上		下		カ変	サ変
		一	二	一	二		
例	書く	起きる	見る	寝る	開ける	来る	する
語幹	か	お	み	ね	あ	(く)	(す)
未然	か	き き ら	み み ら	ね ら	け け ら	こ	せ し
連用	き	き	み	ね	け	き	し
終止	く	きる	みる	ねる	ける	くる	する
連体	く	きる	みる	ねる	ける	くる	する
假定	け	きれ	みれ	ねれ	けれ	くれ	せ せ れ
命令	け	きれ	みれ	ねれ	けれ	こ い	せ
志向	こ	き ろ	み ろ	ね ろ	け ろ	き こ	せ し

音便形が未発達な語彙もあり、「書きた」(書いた)、「打ちた」(打った)「おわりた」(終わった)、語彙により、「思った」「おもた」、「笑った」「わろた」のように、促音便、撥音便が併用されている。

イ) 授受動詞

旧方言では、

私が友達に本をやった。 bandu dufiti fumutfiba ida

友達が私に本をくれた。 dufidu banti fumutfiba ida

(duは係助詞、tiは格助詞ニ、baは格助詞ヲ)

というように、やり手からもらい手に物を渡す行為は、hiruを用いて表現している。しかし、全国共通語では、話者ともらい手が同一のときは「くれる」、同一でないときは「やる」という語を用いる。新方言では、ともに「くれる」を使う。「友達に本をくれた」(友達に本をやった)という使い方をする。

ウ) 移動動詞

旧方言では、聞き手の所へ話者が移動するとき、聞き手を中心に、kun(来る)を使う。全国共通語では、話者を中心に「行く」を使う。新方言では、「行く」と「来る」は併用されている。しかし、ほとんどの人は全国共通語では「行く」を使うと意識している。

5. B. II 形容詞

旧方言では、形容詞は「語幹+さあり」というように形成され、「あり」で活用している。平山輝男氏等⁽¹⁰⁾によると、「高い」は以下のように活用する。

語幹	未然	連用	終止	連体	条件	過去	接続
tahas-	-a:ra	-a:	-an	-aru	-aruka:	-a:da	-ari

新方言では形容詞は以下のように活用する。

例	高 い	め ず ら し い
語 幹	た か	め ず ら し
未 然	か ろ	か ろ
連 用	く か っ	く か っ
終 止	い	い
連 体	い	い
仮 定	け れ	け れ

全国共通語のように未然形の「高かろう」、「めずらしかろう」が存在せず、新方言では後で述べるように推量は「はず」を付け、「高いはず」、「めずらしいはず」と言い、「かろ」は欠落している。旧方言の影響で、「高くある」、「高くあるなら」、「めずらしくある」、「めずらしくあるなら」という使い方が残っている。

5. B. III 形容動詞

全国共通語では形容動詞があり、本来、旧方言には形容動詞は存在せず、現在どのような形が用いられているか関心のあるところであるが、日常生活では、形容動詞は一般に用いず、他の語彙で代用している。しいて、「静かだ」と「きれいだ」を聞いたが、「静かだはず」（静かなはず）、「きれいだ」は「きれくある」（きれいである）「きれくなる」（きれいになる）、「きれいだなら」（きれいなら）と形容詞と混同し、形容動詞は品詞として充分独立し

ていない。

5. B. IV 助動詞

旧方言には、能力可能と状況可能の区別が以下のように存在する。

(うちの子供は大きいので、一人で服を) 着ることができる。 kisibufin

(この服は小さいが、まだ) 着ることができる。 kisarin

新方言においても、着ることができるは、能力可能は「きりきれる」で、助動詞としてはキレル、状況可能は「きれる」で、レルを使って区別を保っている。キレルという語については、全国共通語の「～し尽くす」(明日までには読みきれる) という意味の「きれる」からの借用か、当時九州からの移民が多く、九州方言からの借用か二つの可能性が考えられる。しかし、九州方言では、キルで能力可能を表す地域はあるが、キレルはない。また、レルで状況可能を表す地域もない。そうすると、キレルは全国共通語からの借用と考えた方が良さそうである。共通語化の進行していくなかで、本来の方言での区別は保とうとする姿に、新方言に残る本来の方言の影響の強さを感じさせる。

イ) 否定

旧方言では、

書かない kakanu

のように nu を付属させる。新方言では、「書かん」(書かない)、「食べん」(食べない) のように n を付ける。全国共通語のナイも使うが、親しい場面では n の方が一般的で、旧方言の影響が残ったものであろう。

ウ) 推量・伝聞

全国共通語では、同じ推量でも、伝聞、様態、想像のどれによって推量するかによって語を区別している。旧方言では、どれについても

書くだろう kaku hazī

のように hazī を付属させて用いる。新方言では、「行くはず」(行くだろう)、「高いはず」(高いだろう)、「静かだはず」(静かだろう)、「鳥だはず」(鳥だろう) のように、ハズを動詞、形容詞、形容動詞の終止形に、また名詞プラス断定の助動詞「だ」に付属させて用いる。注意すべきは全国共通語の当然、義務、予定の「はず」と異なり、主観的推量を表す。伝聞による推量「～らしい」、「～だそうだ」、様態による推量「～のようだ」、「～そうだ」、想像による推量「～だろう」にでも、ハズを用いる。しかし、中・若年層は、伝聞には、「高いって」のように形容詞の終止形に、「静かって」のように形容動詞の語幹に、「雨って」のように断定の助動詞「だ」を接続せずに名詞にそれぞれッテを接続して用いる。

エ) 意志・勧誘

全国共通語では、五段活用動詞には「う」、その他には「よう」を付属させるが、旧方言

では、

書こう kaka 起きよう ukira しょう saa 来よう kuu

のように、五段活用、上一段、下一段動詞には、a、サ変動詞には a、カ変動詞には u: を付属させる。上一段、下一段動詞が五段動詞と統合しているために、接続が異なったものである。新方言でも、五段、上一段、下一段の志向形にウ、サ変、カ変には志向形にウ、またはヨウを付属させて、「書こう」、「起きろう」、「寝ろう」、「しろろ」、「しょう」、「せよう」、「きよう」、「こよう」のように用いる。新方言語形の「起きろう」と全国共通語形の「起きよう」を併用している。

オ) 義務

「～なければならぬ」は、旧方言では、

書かなければならぬ kakana: ka: naranu

というように、na:ka:naranu を用いる。新方言では、「行かなければならぬ」は、「行かんとならん」のように、ントナランと使う。

カ) 願望

全国共通語では、「～たい」と助動詞で形容詞活用を行うが、旧方言では、

書きたい kakipīsa:n

と pīsan が形容詞活用を行う。新方言では、動詞の連用形にタイを付けて用いる。しかし、タイは形容詞に準じて、「行きたくする」(行きたがる)「行きたくある」「行きたくあった」「行きたくあれば」のように用いる。

キ) アスペクト

全国共通語では継続態と結果態の区別がないが、旧方言では以下のように区別がある。

「雨が降っている。」は、 fuiuru

「雨が降っていた。」は、 fuiureru

となる。

結果態は、雨が降って道が濡れているのを見て、雨が降っていた状態が結果として残っている時に用いる。新方言でも、継続態はフッテイル、結果態はフッテアルのように、テイルとテアルで区別を示す。単に継続動詞だけでなく、「死ぬ」という瞬間動詞でも、死んでいるのを発見した驚きを表し、「死んである」を使っている。しかし、主に世代によって旧方言の中でもこの区別はなくなりつつあり、旧方言で結果態を持たないものは、新方言でもテアルを持たない。本永守靖氏⁽¹¹⁾によると、沖縄本島では過去に第三者の行為を見て、その事実を報告するのに「読みよった」(読んでいた)のようにヨッタと用いるらしいが、石垣新方言では「読みよった」のヨッタと「読んであった」のテアルの二つを同意で使う。おそらく、ヨッタは沖縄本島から伝わったものであろう。

ク) 過去

全国共通語では、動詞の連用形に「た」を付ける。旧方言では、

書いた kakitta 起きた uke:tta

のように、語幹に itta・e:tta・ida・ita を付ける。新方言でも「行った」のようにタを用いる。「書きた」(書いた)、「打ちた」(打った)、「終わりとた」(終わった)のように、新方言で用いているのは、旧方言と全国共通語の過去形接続の違いがあり旧方言の影響である。

ケ) 受身

全国共通語では動詞の未然形に「れる」、「られる」を付けて表現する。旧方言でも rin・rirun・rarin・rarirun を用いるが、他動詞にのみ受身形は用いられ、自動詞の受身、いわゆる迷惑の受身は存在しない。例えば、「孫に先に起きられる」等は、表現上存在せず、

孫が先に起きた ma du fitari uke:tta

と言う。新方言でも動詞の未然形にレル、ラレルを付けて表現するが、迷惑の受身は存在しない。単純に「孫が先に起きる」を用いる。

コ) 使役

全国共通語では、五段、ナ変動詞の未然形に「せる」を付けて、その他の活用の動詞には「させる」を付けて表現する。旧方言では、

書かせる kakaji min 起きさせる ukuji min

のように jin・jimiru・jimirun を付け、五段と上一段、下一段の区別がない。動詞の活用の統合化によって、全国共通語と接続が異なる。新方言では、サ変以外は動詞の未然形にスを付けて表現する。「起きる」、「来る」は、サスを併用している。

種類	例	使役
五段	行く	いかす
	書く	かかす
上一段	起きる	おきらす おきさす
	見る	みらす
下一段	寝る	ねらす
	開ける	あけらす
サ変	する	させる
カ変	来る	こらす こさす

ここでも、上一段、下一段活用はラスとなり、ラ行五段化している。

5. B. V 助詞

ア) 格助詞の省略

新方言では、主格を表す「が」(花が咲いた)、到着点を表す「に」(東京に行く)、目的格

を表す「を」(酒を飲む)は、省略されることが多い。全国共通語でも、「に」以外は省略されることがあるが、旧方言では省略されるのが普通である。

イ) 係助詞の「が」

注目すべきは、強調のガの使用である。旧方言では、係助詞の du が存在し、

御酒を飲む gu:ʃi du numi

というように、対比、強調の意味で使われる。しかし、全国共通語では、ゾが存在せず、新方言では、最も対応するガで代用する。例えば、

ビールは飲まないが、酒は飲む。

は、

ビールは飲まないが、酒が飲む。

というように用いる。これは、「酒ぞ飲む」から「酒が飲む」というように用いられたものである。また、「ここにがある」というように、「ここに」を強調し用いる。

ウ) 移動手段の「から」

全国共通語では、移動手段は「船で来た」というように「で」で表すが、新方言では「船から来た」というように用いる。旧方言では、

船で来た Φuni radu kita (radu は kara du)

というように用い、「東京から来た」も to:kjo: radu kita と使う。起点を表す「から」と意味分野が近く、語形が一致するためにこのように用いる。

エ) 仮定条件の接続助詞

「ば」と「なら」について、全国共通語では、仁田義雄氏⁽²¹⁾によれば、「なら」の方は、「前件として仮定された事柄が後件の条件」になっており、「たら」の方は、「既成立・未成立の前件が、きっかけや理由などとして、後件成立の条件」になっていることを示し、「ば」と「なら」と「たら」は置き換え可能な用法もあるが、全ての場合に置き換えられるわけではない。旧方言では、

起きれば ukikka:

と使い、五段動詞には ukka:、一段動詞には ikka をつけるのみで、「ば」「なら」「たら」の区別がない。新方言では、全部が同じ様に用いられ、「もっと早く起きるならよかった」というように、タラ、バを用いる時にも、ナラを用いている。

オ) 禁止の終助詞

旧方言においては、

書くな kakina

のように、ina が接続し、終止形に接続していないように見えるが、平山輝男氏他⁽¹⁰⁾によれば、音韻変化を起こしただけで、全国共通語と同じく終止形に接続している。新方言でもナを用いる。

カ) 疑問の終助詞

旧方言においても、

誰か takka

と、全国共通語と同様に用言の終止形、体言に接続し、新方言においても、「誰か」のように、カを用いる。

キ) 終助詞の「わけ」

若い世代の、特に女性の間で、全国共通語の「どこに行くの」の終助詞の「の」のように、「どこに行くわけ」というようにワケが終助詞として使われている。

ク) 終助詞

終助詞として、ヨ、サ、ネが多く使われている。サは、「僕が行くさ」のように、強調の意味を持ち、ネは、「君が行くね」の様に、相手に同意を求めるときに用いられる。

6. ま と め

新方言について述べてきたが、新方言は、あくまで旧方言の構造をそのまま残し、全国共通語や他方言の語彙で写し換えたに過ぎない。全国共通語と旧方言の構造的な対照から見ると、旧方言の文法的構造は新方言にそのまま変化なく残っている。アスペクト、可能表現、係助詞に見られるように、全国共通語になく旧方言にだけある区別も新方言で受け継いでいる様子、推量の助動詞の未分化に見られるように、全国共通語にはあるが旧方言にはない区別は新方言でも区別されていない様子に、いくら全国共通語が進入しても旧方言が根強く生き続けているのが理解できる。新方言を見ると、動詞の統合、授受動詞「やる」の欠落、移動動詞「来る」の使用、能力可能と状況可能の区別、否定の「ん」、推量・伝聞の統合、継続態と結果態の区別、自動詞の受身の欠如、格助詞の省略、移動手段の「から」、仮定条件の接続助詞等、西日本の方言、特に九州との類似性に気が付く。これは、沖縄旧方言が日本方言の一つとして西日本につながっている基層であって、それらの方言の影響を受け新方言に変化したものではないと思われる。もし、九州方言から文法構造を移入したとすると、以下の点に疑問が残る。古層を残しているといわれる九州方言の下二段活用が新方言では存在しない。九州方言では結果態は「ておる」によって表し「てある」を使わない。推量・伝聞が九州方言では「ごたる」で表される。九州方言からの借用も、文法体系を取り入れたのではなく、たまたま九州からの人々との交流が多く、たんに語彙を借用したものであると思われる。同じ混交言語である、ビジン語においても語彙の取り替えは容易に行われている。しかし、九州方言の影響は今後の研究点として残されている。

沖縄の共通語化の過程を考えると、最初は、沖縄旧方言が母語であり、新方言は、旧方言からの干渉程度により話者によって異なる雑多な集積体であった事が想像される。この調査の対象である次の世代では、旧方言と新方言の対等二言語話者になり、調査に対する返答が

統一しており、新方言も言語としての体系的姿を整えている。現在の若年層は旧方言を理解せず新方言を母語として話している。共通語化と言っても、旧方言を滅ぼして全国共通語が取って変わったのではなく、新方言はあくまで、旧方言の基層の上に成立している。ちょうど、沖縄特有の瓦ぶきの家に、新しく共通語というペンキを塗って様変わりはしたが、あくまでも建物の骨組みは沖縄の方言であるという風である。しかし、最近では、更に共通語化し、旧方言の骨組みも揺らぎつつある。昔は、井戸を掘って生活用水を得ていたのが、水道の普及により建物の内部構造にも変化が興り、さらには、鉄筋コンクリートの建物が赤瓦屋根の家屋に取って変わりつつあるように、骨組みまで旧方言の影響が消えてしまうのかもしれない。この新方言が沖縄において生き続けるかどうかは、言語そのものの性格というより、沖縄の言語生活という社会的側面に懸かっていると思われる。バイリンガリズムという形で、公式場面では共通語、私的場面では新方言という使い分けを保てるのか、また、新方言も共通語化の流れの中に死滅するのかは、日本全国の方言と同じ運命をたどるとと思われる。

今回の調査では、文法項目にばかり新方言の記述を行ったが、次ぎには、新方言の変化の様子を世代年齢別に、また、音韻、語彙の面からも調査していきたいと思っている。また、言語変化からの興味のみでなく、沖縄の国語教育の資料にも役立つと思われる。

最後になったが、この調査に飽きずに協力して下さった被調査者の皆様に、また、この論文の掲載にご助力下さった中本正智先生に感謝致します。

注

1. 鹿児島では、なまりの残っている共通語を、「カライモ共通語」と言っているのに対し、奄美では、唐芋（薩摩芋）の事をトンといい、「トン共通語」という言葉が一般化した。
2. 奄美方言においては、無声破裂音 [k] [t] [p] に、喉頭化・非喉頭化の音韻的区別が存在し、非喉頭化音には無印、喉頭化音には [ʔ] を付け、区別する。
3. ɿ は強い摩擦雑音を伴う i であり、以下それに従う。

参考文献

- (1) 国立国語研究所「言語生活の実態——白河市及び付近農村における」秀英出版、1951
国立国語研究所「地域社会の言語生活——鶴岡における実態調査」秀英出版、1953
国立国語研究所「地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較」秀英出版、1974
- (2) 国立国語研究所「共通語化の過程——北海道における親子三代のことば」秀英出版、1965
- (3) 服部四郎「『言語年代学』即ち『語彙統計学』の方法について」（『言語研究』26・27号）1954
- (4) 外間守善「沖縄の言語とその歴史」（『岩波講座 日本語11 方言』岩波書店）1977
- (5) 成田義光「沖縄における Bilingualism について」（『国語学』41）1960

- (6) Weinreich, Uriel "Languages in Contact" Mouton 1953
- (7) 永田高志「与那国の言語変化」(『言語の世界』1-2) 1983
- (8) 国立国語研究所「沖縄語辞典」大蔵省印刷局 1976
- (9) 宮良当壮「八重山語彙」(『宮良当壮全集』8巻 第一書房) 1980
- (10) 平山輝男・大島一郎・中本正智「琉球先島方言の総合的研究」明治書院 1967
- (11) 本永守靖「南島方言と国語教育」(『講座方言学 10 沖縄・奄美の方言』国書刊行会) 1984
- (12) 松本泰文「奄美方言の動詞結果相の問題点」・生塩睦子「単純過去と確言過去」(『琉球の言語と文化』仲宗根政善先生古希記念論集刊行委員会) 1982
- (13) 田中章夫「助詞(3)」(『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店) 1977
- (14) 倉井則雄「トン普通語処方箋——シマの標準語をすっきりさせる法」(自家版) 1987
- (15) 寺師忠夫「奄美方言の動詞」(『奄美郷土研究会報』16号) 1974
- (16) 寺師忠夫「奄美大島」(『方言学講座4 九州・沖縄方言』東京堂) 1961
- (17) 寺師忠夫「奄美方言 その音韻と文法」(根元書房) 1985
- (18) 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子「奄美方言分類辞典」(笠間書院) 1979
- (19) 平山輝男編著「琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究」(桜楓社) 1983
- (20) 本永守靖「沖縄における児童生徒のことば」(『琉球大学教育学部紀要』23) 1979
- (21) 仁田義雄「助詞類各説」(『日本語教育事典』、大修館書店) 1982